

「司祭大会での講話」

2021年1月19日

教区本部

講師 司教 中野裕明

皆さま、改めて新年おめでとうございます。

年賀をくださった神父様方ありがとうございました。今年もよろしくお願い申し上げます。

さて、2021年の司祭大会での私の講話になります。最初に福音書に耳を傾けましょう。「[マタイ福音書 14, 22~33](#)です。」

ただいま朗読された箇所は、今の私の心境を正確に表現している箇所です。イエスと弟子たちは、陸と船に分かれています。しかし、逆風で波に悩まされている弟子たちの乗った船にイエスは近づきます。弟子たちはイエスを見て、「幽霊」だと思いましたが、ペトロだけはイエスの招きに従って、水の上を歩いてイエスに近づこうとします。しかし、強風に気づいて怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫び、イエスの差し出した手によって救われます。そして、「信仰の薄い者よ、何故疑ったのか」とのお叱りを受けます。結果的には、「二人が船に乗り込むと風は静まった」というわけです。

御承知のようにイエスの弟子たちが乗ったペトロの船は教会です。教会はこの世の嵐の中を目指す対岸、すなわち神の国へと進みます。しかし、逆風に遭ってなかなか前に進みません。そこで、イエスの登場です。ここで弟子たちの反応が異なります。ある弟子たちは幽霊だと思いましたが、「安心しなさい、私だ。恐れることはない」とのイエスの呼びかけに応えたのは、ペトロでした。ただイエスの御顔だけを仰いで進んでいけばよかったです。強い波に気が散り恐怖を覚えた瞬間、水に沈みました。イエスから視線を反らしたせいではないでしょうか？

2021年の今日、全世界の教会は、新型コロナ感染拡大によるパンデミック対応を強いられています。感染防止に配慮し、細心の注意を払いながらの教会活動となっています。ただ、一年を超えようとしている、このコロナ禍に対して、もう少し、不安に苛まされているだけではなく、信者さんに対して精神的な支えを提供しなければならない時期に来たのではないかと思います。

先ほどの聖書の話に戻りますが、ご承知のように新約聖書の成立は、紀元100年ごろです。そして、イエス・キリストを神と仰ぎ救い主とする信じる神の民、すなわち教会は、その時、迫害の嵐に見舞われていました。従って、信者たちの信仰は終末的（エスカトン）なものでした。この世では迫害に見舞われるが、復活したキリストを信じ、来世（神の国）での幸せを希求しながら生きていたのです。自分の幸せの最終目標をキリストにおいていたので、旅するこの世では善悪の識別をキリストの教えに置いていました。

話を現代に移します。先日NHKの特集で、「コロナ・パンデミックの今後」を語る番組で、10人の精鋭のウイルス専門家による話がありました。それによると、一人を除いて、9人が、コロナ禍の終焉は2年以内で、4人ぐらいが、今年中と答えていました。そして、その番組の最後にリーダー格の学者が、「み

なさん、現代の科学を信じてください」と述べていました。視聴者に希望を与えるためだったと思います。

ところで、最近私は、ウイルス学者の本を数冊読みましたが、決論的には、このウイルスには謎が多くて、新型コロナウイルスの正体も本当は確定していないということでした。従って、それに対処しようとする、PCR 検査も、ワクチン絶対的なものではないとのことでした。結局ウイルス自体が確認されていないのでその対処法も確定できないのが現実的だとのことでした。

したがって、私たちは科学を信じて構わないが、完全ではないという事は事実です。実際、医療の現場では難しい手術の前に、患者は担当医から、手術が100%成功することではないとの説明を受け、その書類に署名しますが、人間の世界には絶対ということはありません。この不完全性があるにもかかわらず、私たちは前進しなければならないわけですが、そこには人や事柄に対する信頼が必要になって来ます。

「信仰の薄い者よ、何故疑ったのか？」というイエスの言葉が、胸に響きます。

さて、このような話の後で、教区シノドスの話に移りたいと思います。

教区シノドスの提言は、「信仰」、「典礼」、「宣教」という教会の3つの柱について皆さんの意識を集中させ、それらの理解を深めてもらいたいというのが、私の思いです。

「信仰」、「典礼」、「宣教」というこの3つの柱は、教会を構成している柱のことです。教会と言っているのは、この場合、「キリストの肢体」である私たちキリスト信者自身のことです。

ところで、来月25日に鹿児島教区は創立66周年を迎えます。教区として66歳になったということですが、現在私たちが使用している教会堂も徐々に修繕や建て替えが必要になってきています。60年前、当時の司教様や神父様方は、福音宣教のために、教会と幼稚園、それに施設や学校を作りました。建物の維持管理には時代に応じて必要な手立てが必要です。ただ、見える建物と同時にそこに集まる共同体がしっかりしていなければ、つまり、教会共同体が成長していなければ、教会は活性化しないのです。

そのように考えた時、私たちが教会であること、もう少し言うなら、私たちは、何を求めて教会に集まるのか、だれを信じて集まるのか、何をしに教会に集まるのか、教会は社会に対して何をするとところなのかを、みんなで問い合う作業が必要だと思うのです。

今までの話を前提にして、3つの柱について個別にお話してみたいと思います。

この3つの柱については、神学生時代に十分勉強しておられると思うので、私なりの解釈で、ポイント（観点）だけをお話します。

まず「信仰」についてです。これはキリストの預言職の実践です。預言者とは、神の言葉を預かってそれを人々に告げる仕事なので、神の言葉（聖書）に根拠を置く必要があります。

ヘブライ書は「今日、神の声を聞くなれば心をかたくなにはならない」という詩編の言葉を引用した後、次のような解釈を加えています。「というのは、神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の

剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができるからです。」(ヘブライ書4, 12)「更に、神のみ前で隠れた被造物は、一つもなく、すべてのものが、神の目には裸であり、さらけ出されているのです。この神に対して、私たちは自分のことを申し述べねばなりません。」(同上4, 13)

この神の言葉を受け入れ、自分が変えられてこそ、キリストの預言職を果たせるのではないのでしょうか？また、この神の言葉の受容が典礼や宣教の基礎となるべきことは言うまでもありません。

次に典礼についてです。同じくヘブライ書からの文章を引用したいと思います。

「大祭司はすべて人間の中から選ばれ、罪のための供え物や、犠牲をささげるよう人々のために神に使える職二人命されています。大祭司は、自分自身の弱さを身にまとっているのです。無知な人、迷っている人を思いやることのできるのです。また、その弱さのゆえに民のためだけでなく、自分自身のためにも罪の償いのために供え物を捧げなければなりません。」(ヘブライ書5, 1～3)

キリストの司祭職に召されている私たちは大祭司キリストを模倣しなければなりません。また、神の民は司祭たちが聖なる人であることも願っています。それは、聖なる叙階を受けた人だから、神の祝福をもらいたいからです。このような要望に十分応えられる司祭になっていただきたいと思います。

最後は、福音宣教です。それは、善き牧者であるキリストをまねることです。「私は良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」(ヨハネ10, 11) ご存じのように、イエスのこのお話は、[エゼキエル 34 章](#)に描かれている、イスラエルの牧者の姿とまるで逆です。長いですが 34 章全部読んでみます。

私は福音宣教とは、「愛の実践」のことだと考えています。哲学科生の時に教わった哲学の命題が今でも忘れられません。それは、「人は考えたように行動するのではなく、行動したように考える」というものです。出典は不明ですが、たぶん、スコラ哲学だと思います。ところで、牧者は民の統治や、管理の役務を含みます。どうぞ、愛の心をもって、奉仕の精神で、その役務を果たしてほしいと思います。

最後になりますが、先月皆さんに意見徴収したように、現在、日本の司教団は、司祭の養成プログラムについて検討しています。それは、2016年にバチカンから発布された、「司祭養成綱要」の要請によるものです。この新しい要綱は、司祭の召命をその芽生えから、本人の死に至るまでの期間を「召命の旅」ととらえ、司祭叙階までを、初期養成(Initial Formation)、叙階後を生涯養成(Ongoing Formation)と、捉え直していることが特徴です。勿論、叙階後が、自己養成が必要だ、ということは前から言われていましたが、今回の綱要では、司祭間で兄弟的交わりをはぐくむことの重要性が強調されています。

それでは、教区のモットーである「神の国の建設」のために共に手を携えてがんばってまいりましょう。

注. 本文中の聖書のリンク先(2ヵ所)は、編集者が読者の便宜のため挿入しました。